



信州大学
SHINSHU UNIVERSITY

発達障害の早期診断に1歳半健診が有効

自閉スペクトラム症が予測できることを示唆ー

【研究成果のポイント】

- 1歳半健診が発達障害の早期診断に有効であることを明らかにしました。

【概要】

信州大学医学部子どものこころの発達医学教室・精神医学教室の篠山大明准教授、本田秀夫教授、鷲塚伸介教授、および衛生学公衆衛生学教室の野見山哲生教授らの研究グループは、岡谷市および信濃医療福祉センターの協力を得て、2009年度から2011年度までの3年間に出生し同市で1歳半健診を受けた全幼児1067名を対象に、発達障害の一種である自閉スペクトラム症の発生率とリスクファクターを調査しました。

就学年齢までに3.1%の子どもが自閉スペクトラム症と診断されましたが、その多くが1歳半健診で運動能力と社会的コミュニケーション能力の障害を指摘されていました。この結果は、日本のほぼ全ての子どもが受ける1歳半健診によって自閉スペクトラム症が予測できることを示唆します。

本研究は国際的に最も権威ある自閉症専門誌の1つである、*Journal of Autism and Developmental Disorders* 誌に2020年7月21日にオンライン掲載されました。

【背景】

最近20年間で自閉スペクトラム症と診断される人の割合が世界的に増加しており、2014年の米国の調査では8歳児での有病率は1.68%であったと報告されています。近年の有病率増加の主な理由の1つとしてスクリーニング精度の向上があげられます。

自閉スペクトラム症の早期発見と早期介入は予後改善のために重要です。しかし、一般的なスクリーニングツールを利用しても2歳未満で早期発見を行うことは困難であると考えられています。1歳半健診における自閉スペクトラム症の早期発見の精度向上に努めている岡谷市では、保健師が各児に対し丁寧なスクリーニングを行っています。さらに、自閉スペクトラム症の疑いがある児は信濃医療福祉センターの受診につなげ、早期に診断し支援を行う体制が確立しています。本研究は、早期診断の体制が整備されている岡谷市で、自閉スペクトラム症の累積発生率の調査を行いました。さらに、後に自閉スペクトラム症と診断された児において1歳半健診時に見られた特徴について調べました。

【研究手法・成果】

2009年4月2日から2012年4月1日に出生し、岡谷市で1歳半健診を受けた1,067名を対象としました。信濃医療福祉センターの医療情報を調査したところ、対象となった1,067

のうち33名（男児22名、女児11名）が小学校入学までに自閉スペクトラム症と診断されていました（累積発生率は3.1% [男児4.3%, 女児2.0%]）。自閉スペクトラム症と診断された33名と、診断されなかった1,034名を比較したところ、自閉スペクトラム症と診断された児の方が、1歳半健診時の微細・粗大運動能力および社会的コミュニケーション能力が低い傾向にあることがわかりました。

【波及効果・今後の予定】

本研究で報告された累積発生率は、一般人口における医療的診断に基づく自閉スペクトラム症の発生率としては、今までの研究で報告された中で最も高い値でした。この結果から、1歳半健診で丁寧なスクリーニング体制を整えることによって、高い感度での診断が可能であることが示唆されました。さらに、自閉スペクトラム症の児はすでに1歳半の時点で、微細・粗大運動能力および社会的コミュニケーション能力の発達が遅れていることが示され、これらは自閉スペクトラム症を早期に予測する因子であると考えられました。今後の調査の継続により、乳幼児健診を活用した自閉スペクトラム症の早期診断システムの開発が期待されます。

【論文タイトルと著者】

タイトル：Brief Report: Cumulative Incidence of Autism Spectrum Disorder
Before School Entry in a Thoroughly Screened Population

著者：Daimei Sasayama・Tetsuya Kudo・Wakako Kaneko・Rie Kuge・Noriaki Koizumi・
Tetsuo Nomiyama・Shinsuke Washizuka・Hideo Honda

掲載誌：Journal of Autism and Developmental Disorders（オンライン掲載）

<URL> <https://link.springer.com/article/10.1007/s10803-020-04619-9>